

私立大学図書館協会東地区部会研究部
2010年度パブリックサービス研究分科会 第9回講義録

講義:「システムリプレイスについて」

講師:成城大学図書館 運用課 伊藤則之氏

日時:2011年1月27日(木) 10:00-11:00

場所:成城大学図書館 4F 会議室

書記:市川、塩瀬、杉本

講師の伊藤氏は、成城大学図書館が初めて図書館システムを導入した時より、現在に至るまで、同館の図書館システムの発展に携わってこられた。

今回は、昨年8月にリプレイスした同図書館システム等について、そこへ至るシステムの変遷を交えてお話いただいた。

1. 成城大学における図書館システムの変遷 (第1期 1994~1999年)

【旧システム】

CALIS (開発・販売:京セラ丸善システムインテグレーション)

- ◇フルカスタマイズを売りにした製品
- ◇クライアントは Telnet ベース(一部 Web ベース)
- ◇Caché というオブジェクトデータベースで動作する
- ◇書誌は和書は Japan/MARK 洋書は LC MARK 形で格納していた

- ・学内 LAN 設置に伴い PC3 台導入
- ・学術情報センター接続システムを導入
- ・閲覧システム稼動、学術情報センター-ILL システムに参加
- ・新着図書案内開始
- ・雑誌管理システム開始
- ・蔵書点検システム、図書管理システム開始

以上が、初期システム化の時代のお話で、1999年11月に新業務サーバを稼動させ、翌年1月にWebOPACを、3月に図書館ホームページを開設するという第1次リプレイスを完了させ、次の第2次リプレイスフェーズへと進んだ。

2. 成城大学における図書館システムの変遷 (第2期 2000~2007年)

- ・新業務サーバ稼動
 - CAT-P クライアントの導入、D/B のバージョンアップによる、OPAC での全文検索が可能
- ・利用状況サービス開始
- ・AV システム稼動(視聴覚資料用 それまでは MAC が使われていた)

～ 初代システム時期の総括 ～

* 1994 年 9 月にはじめて図書館システムとして「CALIS」を導入した。

「CALIS」システムは図書館業務を包括したパッケージ製品ではなく、カスタマイズ対応型(各機能の個別開発型)製品であったため、サービス開始時期をシフトさせながら機能追加を実現できた。

→ 例えば利用者サービスの部分では、1996 年に Telnet 版のネットワーク対応 OPAC を公開したが、Web ブラウザの普及により Telnet 需要が減ったため WebOPAC を公開した。

その後も UTF-8 化と全文検索(中間一致検索)が可能になるようにカスタマイズ、利用状況紹介サービスを追加するといったような、時代に合わせた機能追加を行ってきた。

3. 成城大学における図書館システムの変遷 (第3期 2007 年 11 月からスタート)

< 今回のリプレースに向けての動き >

～ 次の外的・内的要因によりリプレースへ向けた検討が動き出した～

- ・旧システムメーカーからの継続的サポート困難との示唆あり
- ・フルカスタマイズの場合、他の職員も全仕様を把握していないと業者との折衝が困難になる
- ・書誌フォーマットを NII フォーマットへ統一したいとの要望

< メーカーへ次の内容のアンケート調査を実施 >

- ・標準的なパッケージソフトではあまり実装(用意)されていないであろう機能の搭載範囲
- ・不足している必要な機能の作り込み(カスタマイズ)にどの程度対応可能か

→ カスタマイズに関しては、どのメーカーも難色を示した

また、学生証の IC 化の動きや、会計システムの一元化の動きが出たこと等を理由に学内の動静を慎重に見極め、最適なリプレース時期を見計らった

< メーカーの最終選定 >

- ・主要メーカー 6 社から 3 社に絞り込み、関係者間で 3 社のシステムの比較検討を行なう
- ・相応の時間をかけ、審議の結果、NEC の E-Cat' s Library を導入することを決定した

【新システム】

E-Cat' s Library(開発:CMS 販売:NEC)

- ◇NII に準拠したシステム
- ◇クライアントは完全に Web ベースで Ajax を採用している
- ◇データベースは Oracle

< 導入後 >

- ・メーカー変更を伴うリプレースのため、各データの移行に大変な作業時間を要した

4. まとめ

- ・リプレース事例報告は成功事例の方が強調される傾向があるようだ
- ・メーカー変更を伴うリプレースは困難を極めることを体感した
- ・メーカーがサポートしていない機能は、サービスとして実現しにくい(できない?)
- ・図書館側の視点と、メーカー側の視点にズレを感じる

→ 利用者サービスに重点を置く図書館側と、それよりも他社製品との競合に重点を置くメーカー側の間には意識のズレ(例えば…OPAC では書誌情報の全文検索を考慮していない。アマゾンなどのように「この本を借りた学生は、こんな本も読んでいる」的信息が OPAC 以上に表示されたら貸出数の増加が期待できるのではなどの観点が無いようである)があり、自館のイメージや要望は、継続的に要求しなければ、真の利用者サービスの向上にはたどり着かない。

- ・機能強化として外部プログラムの連携も視野に入れた方がいい
- ・利用者にとっての比較対象は、他の図書館システムでは無く、internet 上のサービスである。

以上